高知大学考古学調査研究報告第９冊

坂ノ松古墳測量調査報告書

2011年１月

高知大学人文学部考古学研究室

高知大学考古学調査研究報告第９冊

坂ノ松古墳測量調査報告書

2011年１月

高知大学人文学部考古学研究室

例　言

1　本書は高知県南国市稲生丸山字坂ノ松越しに所在する坂ノ松古墳の測量調査報告である。

2　本調査は、高知大学人文学部人間文化学科考古学研究室が主体となり、調査を実施した。調査は、清家章（人文学部教授）が担当した。

3　本調査は日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）「横穴式石室導入にみる南四国と瀬戸内の交流と古墳展開の研究」の一部を使用して実施した。

4　調査期間は2010年８月24日から９月６日である。

5　挿図のうち、図１・２・６・10の方位は真北を示し、図７・８・９の方位は磁北である。標高は海抜を示す。

6　調査には高知大学大学院人文社会科学専攻大学院生・人文学部考古学ゼミ生・人文学部１～２年生ならびに京都大学大学院文学研究科大学院生が参加した。参加者は以下のとおりである。岡本治代（高知大学大学院）・山本亮（京都大学大学院）・石井聡之・村上裕紀・岩橋恵・藤井雄大・永島順太・野口真未・平尾英希（以上、高知大学学生）。整理作業には上記の多くの学生が参加したが、とくに岩橋・藤井・永島・野口・平尾が主力を担った。

7　写真の撮影は岡本治代が主として担当した。

8　調査の実施にあたり、地権者・地元自治会・南国市教育委員会・トヨタ部品四国共販より多大な御協力をいただいた。

9　石室の左右は、玄室奥壁から羨道を見た場合の方向を指す。

10　本書の執筆は、清家・山本が担当した。分担は文末に示した。

11　本書の編集は清家が担当し、岡本がこれを補佐した。

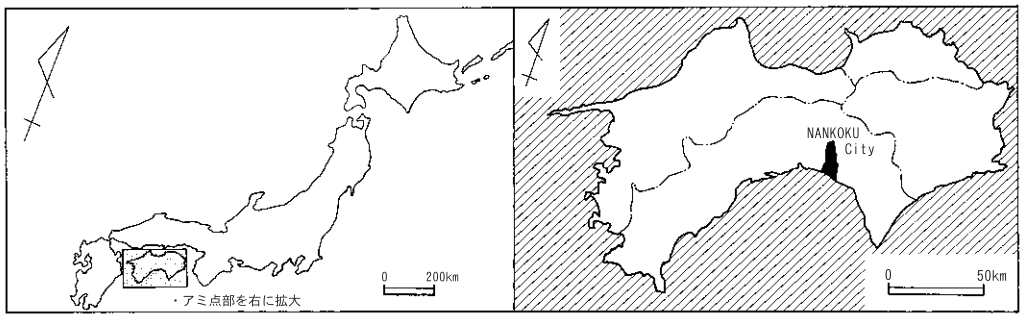

図１　南国市の位置

目　次

第Ⅰ章　調査経過…… 1
　1　周辺の遺跡…… 1
　2　調査の経緯と経過…… 3
　3　謝辞…… 4
第Ⅱ章　調査成果…… 5
　1　古墳の立地…… 5
　2　墳丘測量の成果…… 5
　3　石室実測の成果…… 7
第Ⅲ章　まとめ……11

図版目次

図版

1　1　古墳の立地
　　2　墳丘（南から）
2　1　墳丘（北から）
　　2　石室入口
3　1　玄室奥壁
　　2　玄門
4　1　右側壁
　　2　左側壁

挿図目次

図１　南国市の位置（平尾製図）…… iii
図２　周辺の主な遺跡（山本製図）…… 2
図３　出土須恵器（永島製図）…… 3
図４　作業風景…… 4
図５　調査中の１コマ…… 4
図６　古墳の立地（清家製図）…… 5
図７　墳丘測量図（岩橋製図）…… 6
図８　墳丘復元図（岩橋・清家製図）…… 7
図９　石室実測図（藤井製図）…… 9～10
図10　特大型・大型石室の分布と坂ノ松古墳（清家製図）……11

第Ⅰ章　調 査 経 過

1　周辺の遺跡

坂ノ松古墳は南国市稲生丸山字坂ノ松越しに所在する。南国市は広義の高知平野のうち東側、香長平野の物部川下流の西岸域から内陸部を占める。香長平野の南西部に位置する、稲生地区の盆地状の地形を囲む北側の山、通称向山の南斜面の谷筋に坂ノ松古墳は築かれている。

盆地北側の山並みは東西で切れており、東側の出口付近には里改田遺跡が位置している。そこからは広大な香長平野と、坂ノ松古墳が築かれた当時は平野南側に入り込んだ土佐潟を望むことができたであろう。土佐潟の北方側には弥生時代前期から後期にかけて高知平野最大の拠点集落であった田村遺跡群が位置していた。坂ノ松古墳が位置する向山の北側にも西野々遺跡、介良野遺跡などで弥生時代の集落跡がみつかっている。

田村遺跡群は弥生時代後期中に解体し、弥生時代終末期から古墳時代前期になるとヒビノキ・伏原、林田などの長岡台地上の遺跡をはじめ、台地・自然堤防上や平野の比較的奥のほうに集落が築かれる例が多くみられるようになる。南国市域でも、古式土師器Ⅰ期（出原1990・1993）の資料が出土した小籠遺跡、泉ヶ内遺跡や岩村遺跡は市域の平野部北半に位置し、介良野遺跡も平野部奥の扇状地の端に所在している。しかし、古式土師器Ⅱ期（出原1990・1993）以降の時期の資料数は高知平野全体でも多くはない。周辺では介良遺跡や小籠遺跡で古墳時代中期にさかのぼりうる須恵器が出土しているものの同時期の住居址の確実な例はなく、古墳時代後期に比定される住居址も小籠遺跡・伏原遺跡などでわずかに確認されているに過ぎない。古墳時代を通して集落の動態は依然として不明な点が多い。

古墳についても集落と同様に前～中期の様相は明瞭でない。高知平野では前期古墳の確実な例は知られておらず、中期古墳と考えられる狭間古墳と長畝２号墳を除いてそのほとんどが古墳時代後期以降に位置づけられる。坂ノ松古墳を中心にして後期以降の古墳分布を見てみよう。坂ノ松古墳から谷筋を通って山塊の北側に降りると介良野方面に出る。介良野からは東側に船岡山、西側に高間原山が位置し、それぞれ舟岡山古墳群と、高間原古墳群、狸岩古墳群、明見彦山古墳群が所在しており、一帯は高知平野でももっとも古墳が多い地域のひとつであると言える。坂ノ松古墳も単独で存在したわけではなく、周辺には数基の古墳があったことが知られている。坂ノ松古墳は坂ノ松古墳群を構成する古墳のひとつであり、同じ山塊には馬背・丸山古墳群、井川（ゆうこう）古墳群が存在する。そのほか、向山の東麓には秋葉山南平古墳・蔵光古墳の２基の古墳が存在する。坂ノ松古墳群には坂ノ松古墳のほか２基の古墳があったとされるが、いずれも開墾により破壊され、現存しないとされる。

古代における南国市域は土佐国衙、土佐国分寺、比江廃寺が築かれるなど、土佐国の中心地

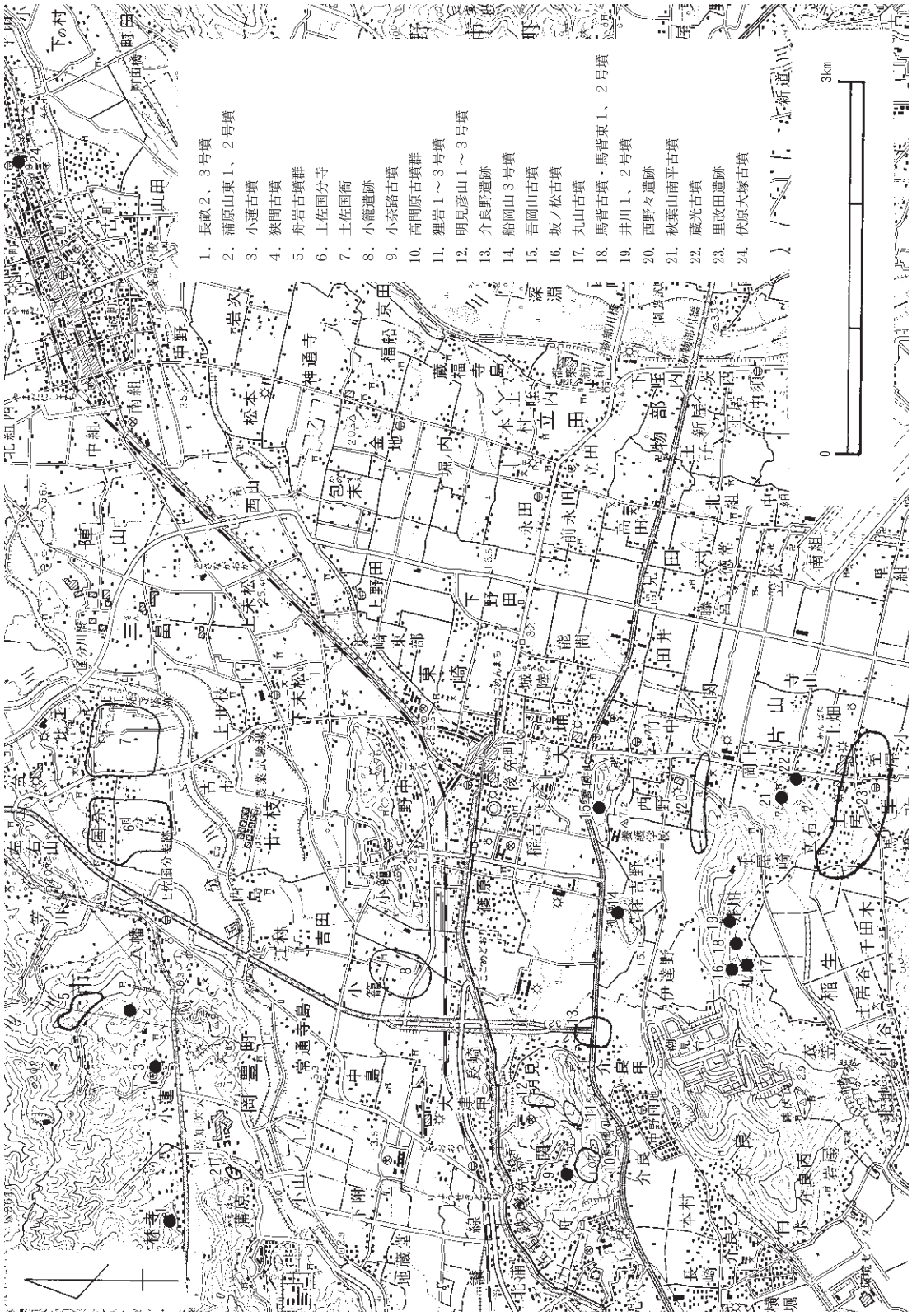
1. 長畝2、3号墳
2. 蒲原山東1、2号墳
3. 小蓮古墳
4. 狭間古墳
5. 舟岩古墳群
6. 土佐国分寺
7. 土佐国衙
8. 小籠遺跡
9. 小奈路古墳
10. 高間原古墳群
11. 狸岩1～3号墳
12. 明見彦山1～3号墳
13. 介良野遺跡
14. 船岡山3号墳
15. 吾岡山古墳
16. 坂ノ松古墳
17. 丸山古墳
18. 馬背古墳、馬背東1、2号墳
19. 井川1、2号墳
20. 西野々遺跡
21. 秋葉山南平古墳
22. 蔵光古墳
23. 里改田遺跡
24. 伏原大塚古墳
0
3km

図2　周辺の主な遺跡

として繁栄した。坂ノ松古墳周辺でも、小籠遺跡や里改田遺跡で古代の遺構が確認されている。とくに西野々遺跡では古代の官衙に関連する遺構が検出されており、緑釉陶器や製塩土器が出土している。中世には香長平野南部に田村城館が築かれるが、稲生地区でも盆地の東西の入り口付近にそれぞれ里改田土居城、下田土居城が築かれていたことが知られる。このことからは稲生の盆地が当時、高知平野の東西を結ぶルートのひとつとして意識されていたことがうかがえる。また近現代の遺跡としては、香長平野南部には掩体壕やトーチカ陣地といった、太平洋戦争下の海軍高知航空隊や本土決戦準備にかかわる戦争遺跡が現在でも多数残されている。坂ノ松古墳が位置する向山の尾根筋にも、かつての通信濠や陣地が点在している。

このように坂ノ松古墳は、古墳時代後期～終末期から古代に土佐の中心として栄えた南国市域の南部に位置するわけである。坂ノ松古墳の様相を解明することは、この地域の古墳時代社会を知るうえで重要であると言えよう。（山本）

2　調査の経緯と経過

調査の経緯　高知大学考古学研究室では、７年にわたり高知の古墳時代をテーマに調査を行ってきた。本年度から研究室代表の清家は科学研究費を新たに得ることができた。科学研究費申請時から研究課題「横穴式石室導入にみる南四国と瀬戸内の交流と古墳展開の研究」にふさわしいフィールドとして南国市周辺の古墳を候補に考えていた。南国市は高知平野で数少ない中期古墳が築造され、それ以後も継続的に古墳が築造される地域である。横穴式石室導入の過程を研究する上できわめて重要な地域であった。まず、フィールドの候補地として明見彦山１号墳を考えた。同古墳はすでに我々の手によって、墳丘測量と石室実測が行われ、石室形態が舟岩型の中では古相を呈しているとの見解が示されている。しかし、古墳周囲は蝮が多く住み、夏季の調査は危険であると判断し、春季に調査を行うことを考えた。

明見彦山１号墳を深く理解するためにも、周辺の古墳の内容を明らかにすることは有効である。坂ノ松古墳は南国市にあり、その石室はやや小振りながらも明見彦山１号墳石室と類似点が認められた。正式な調査が行われておらず、墳丘と石室の図面もない古墳であったので、墳丘測量と石室実測を行うことは今後の研究にきわめて有効であると判断した。また、坂ノ松古墳は、後述するように石室石材の一部が崩落していたので、その保存に関し懸念されるところがあった。石室の崩壊が進むと貴重な文化財が何の情報もないまま失われかねない。今回

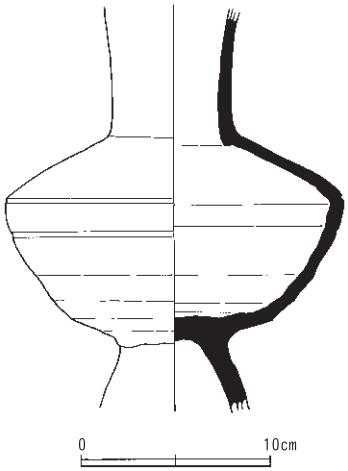

図３　出土須恵器
（廣田1991より再トレース）

図４　作業風景

図５　調査中の１コマ

の調査はそうした文化財の保全にも役立つと考えられた。文化財保存ならびに研究と学生教育という３つの意義を兼ね備えた調査になると考え、本調査を企画したのであった。　（清家）

調査経過　本古墳はこれまでに正式な調査が行われたことがない。ただ、これまでに何度か人の手が入ったようである。南国市史には大正中期頃に開墾のため羨道の一部が破壊されたことが記載されている（廣田1979）。またいつの頃かは確かではないが須恵器が出土し、出土遺物は地元の小学校に保管されていたというが、現在は伝わっていないようである。図３は坂ノ松古墳から出土したという須恵器である（廣田1991）。台付きの長頸壷であると思われる。７世紀に下る遺物であろう。ただ、追葬時の副葬品である可能性もあり、古墳の築造年代を考えるには慎重でなければならない。このような状況の下、調査に着手した。調査は2010年８月24日から開始し、同年９月６日に終了した。酷暑の中の作業であったが、参加学生の懸命な作業により無事に終了することができた。　（清家）

３　謝　辞

本調査を遂行するに当たり、地権者には古墳の調査を快諾していただき、地元自治会にはさまざまな援助をいただいた。南国市教育委員会は、地元との交渉など作業の円滑化に関してさまざまな援助を与えられた。また、出原恵三氏からは測量ポイントについてご教示をいただき、トヨタ部品四国共販はレンタカーについて便宜を図られた。以上のようなご協力を得て、本調査は遂行することができた。お世話になった皆様方に心よりお礼を申し上げたい。　（清家）

参考文献

出原恵三　1990『西分増井遺跡群発掘調査報告書』春野町教育委員会、高知

出原恵三　1993『拝原遺跡』香我美町教育委員会、高知

廣田典夫　1979「第３編第１章　古墳時代」『南国市史』上巻　南国市、高知：pp. 181-316

廣田典夫　1991『土佐の須恵器』四国考古学叢書２、高知

第Ⅱ章　調 査 成 果

1　古墳の立地

坂ノ松古墳は、先述のとおり通称向山の南側斜面にある。坂ノ松古墳は坂ノ松古墳群中の１基であり、ほかに２基の古墳があったとされるが、開墾により本古墳を除いて遺存していない（廣田1979）。稲生の集落から向山山頂に向かう山道を登っていくと、山道の東側で尾根頂部やや下の標高47～50ｍの地点に古墳は存在する。丘陵の麓から古墳の付近まで南北方向の浅い谷が入っており、古墳は谷部奥のやや東側に位置している（図６）。　（清家）

2　墳丘測量の成果

閉合トラバースを組んだ上で、平板にて100分の１地形図を作成した（図７）。古墳周辺は段々畑が営まれていたようで、周囲には石垣で作られた段が散見される。古墳に至る山道西側も畑だったようで、山道の西側には石垣が続いている。

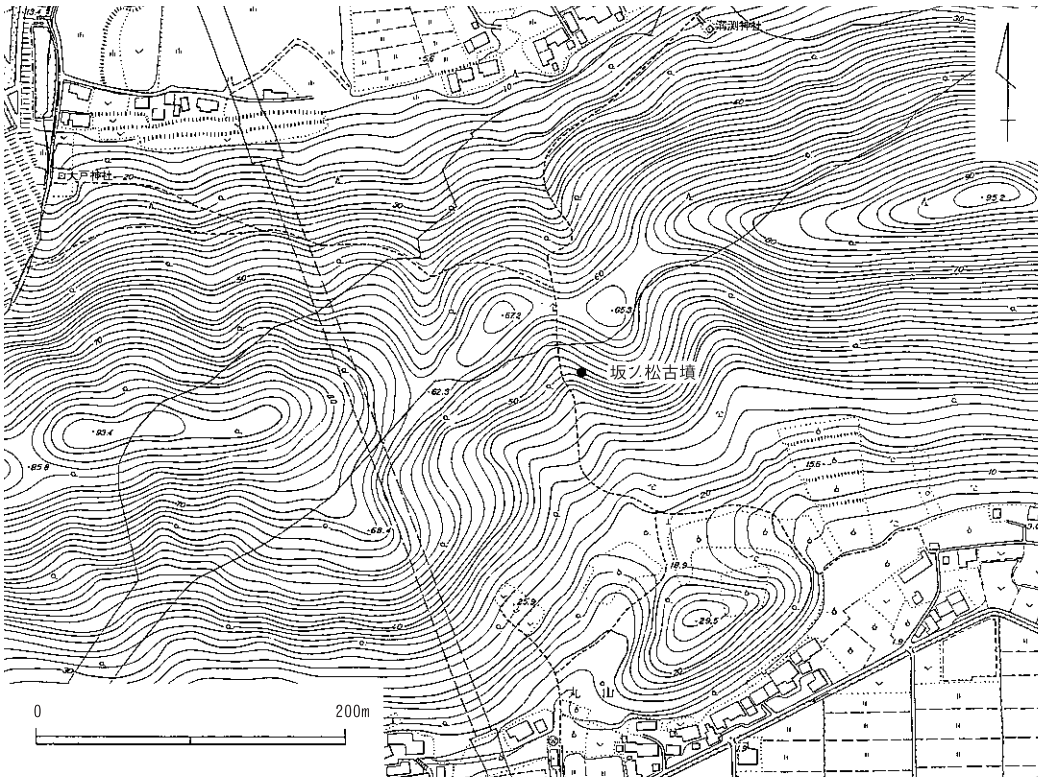

図６　古墳の立地

そうした畑の開墾によってであろうか、古墳の東部・西部・南部は改変が著しい。墳丘の東側には段々畑の石垣が２段あり、また南東側にも石垣がある。また、石室の南側は平坦面となっているが、ここはみかん畑として利用されていたことが南国市史に記されている（廣田1979）。古墳の東側から南側はとくに大きく削平を受けて墳丘は崖面をなしている。また、墳丘西側は山道によってやはり削平を受けている。

旧地形を残すのは墳丘北側だけと考えられる。墳丘北側は尾根頂部から南に下ってくる緩斜面が続いているが、標高49.400m付近で平坦面がある。標高49.000mから49.250mの等高線を見れば明らかなように、この平坦面には東西からそれぞれ弧状を描く浅い谷地形が入ってきている。その平坦面からさらに南、すなわち石室側には古墳墳丘の盛り上がりがあって、最高点は標高49.810mとなっている。

このように後世の改変が多く認められるため、墳形や墳丘規模を考える材料は少ない。しかしながら、墳丘北部は旧地形を反映していると考えられた。ここにある平坦面に東西から谷地形が入ってくる様子が認められた。おそらくこれは、丘陵と墳丘を区画する周溝などの遺構が反映されているものと考えられる。この谷地形が円弧を描いていること、さらに石室を中心とした墳丘残存部分の等高線も円弧を描いていることを併せて考えると本古墳は円墳である可能性は高い。

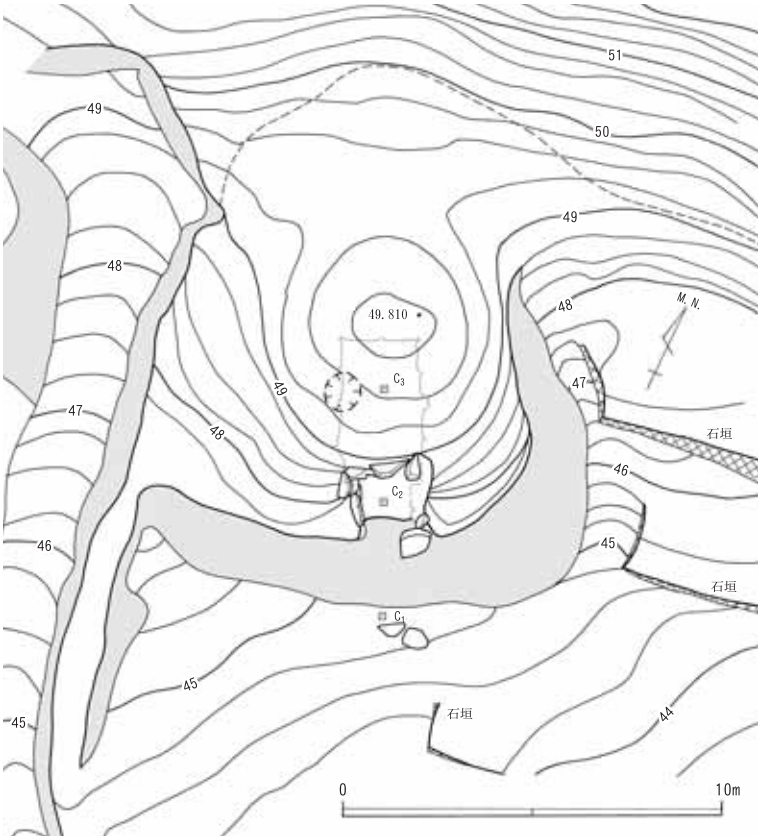

図７　墳丘測量図（アミ部は崖面）

墳丘規模はさらに情報が少なく確たることは言えないが、今ある情報をつなぎ合わせて推測してみる。横穴式石室墳は、石室の奥壁あるいは玄室の中央部が墳丘の中心になることがある。本古墳の場合、奥壁は現状で墳丘の北側に偏っているようにみえる。そこで

玄室中央部を円の中心点として、墳丘北側で認められた平坦面ならびにそこに入る谷地形を通るような円を描いてみると、直径11mの円を描くことができる（図８）。この円は墳丘南側では削平された崖面の下端に一致し、東側では畑の石垣と重なる。崖面や石垣が本来の墳丘端を何がしか反映していることも考えられないことはない。墳形・墳丘規模ともに発掘調査を経て確定されるべきであり、根拠は薄弱ながらも、この推測は大きく外れるものではないであろう。本古墳を直径約11m程度の円墳と推測する所以である。　（清家）

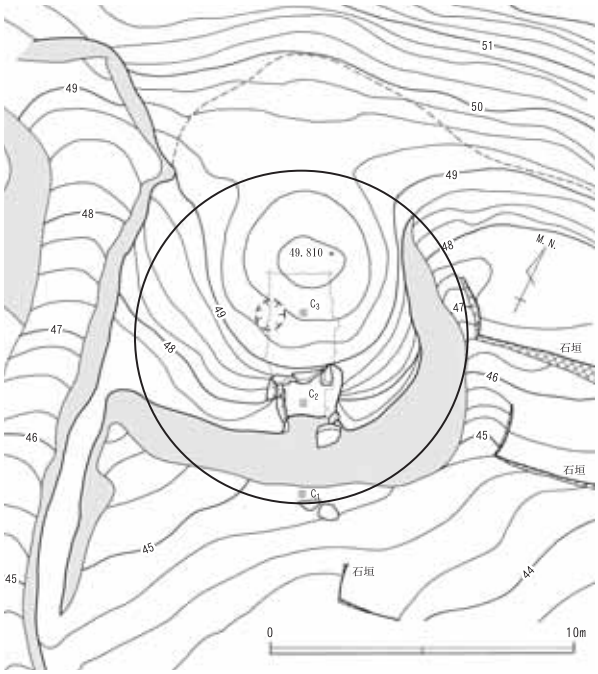

図８　墳丘復元図

３　石室実測の成果

まずは石室の遺存状況から述べることとしよう。なお、石室の左右は、玄室奥壁から羨道を見た場合の方向を指す。玄室はおおむね原形を保っているが、右側壁については奥壁側の上半が崩れ落ち穴が開いている。この穴は墳丘外に通じている。羨道部は残存長1.0mであるがほんらいはさらに長かったと推察される。現状における羨道先端より南は削平を受け崖状になっており、崩れ落ちた石が周辺にあるからである。また、羨道部は左右壁上半と天井石を欠く。とくに羨道左側壁は落石と流出した盛土の堆積によってほんらいの形態がわかりにくい。

玄室平面形についてみていく。右側壁を見れば、奥壁から羨道にむかって基底石はやや外開きに３石が並んでいる。残る玄門側の基底石１石は向きが変わりやや内側に入る。右側壁の基底石は緩い逆「く」の字状を呈して並んでいるわけだ。左側壁は玄門部分が落石と流入土で形状が明確でないが、右側壁基底石とおおよそ同じであると考えられる。玄門部は右側壁に袖部がある。袖石は羨道側にせり出さない。左袖部は先述の通り落石と流入土で明確ではない。しかし、それを復元する手がかりは存在する。羨道左側壁の先端部の２石は原位置を保っているようである。このラインを玄室側に延長し、玄室左側壁の基底ラインを羨道側に延長すると約30cmの食い違いが生じる。おそらく右袖部を石室中軸で折り返したところに、袖幅約30cmの袖部が形成されていたものと考えられる。すなわち本石室は両袖式の石室で、両袖石は羨道側にせり出さない形状であったと考えられる。

羨道右側石は基底石２石が石室中軸に並行するように置かれている。先述のように羨道は現

状より長かった可能性が高い。基底石の上に横長の石材が１石積まれ、現在２段分が残っている。羨道左側壁は落石と盛土流出土が堆積し、明瞭でないところも多いが、先端の２石は原位置を保っている可能性が高い。１段分しか残っていない。

現状の床面をみると、玄室右奥隅に直径1.2m・深さ約30cmの攪乱がある。おそらく盗掘抗の名残であろう。奥壁よりの左側壁沿いに長軸60～90cmの石材が３個あるが、これは右側壁上部が崩落してここにあるものであろう。なお、この石材は平面図に描いてはいるものの、奥壁・左側壁の立面図には意図的に描かなかった。これは石室壁体の情報を少しでも多く図に納めようとしたためである。玄門付近には拳大から人頭大の石材が並んでいるがこれも羨道部からの落石であろう。玄室奥の攪乱抗をみれば、現状の床面は本来の床面よりまだ高く20～30cmは流入土が堆積している可能性が高い。

奥壁は、縦長の大きな石を２つ設置して基底石としている。左側が高さ100cm以上・幅90cm、右側の基底石が高さ138cm以上・幅100cmである。この上部に横長の石材を基本的に４段積み上げている。下から２段目まではほぼ垂直に石を積むが、３段目以上はやや急な持ち送りが行われている。

左右側壁の石積みは共通点がある。左右側壁において奥壁側の基底石２石は他の基底石よりも大きい。これらの基底石の上面は、玄室を構築する際の基準となっていたようであり、玄門側にむかって目地が通っている。また左右両側壁において、奥壁側の石材が全体的に大きく、玄門側の石材が小振りなことも共通している。そのため奥壁側では４～５段の石積みが基本であるが、玄門側では５～６段の石積みとなっている。羨道右側壁では横長の石を積んでいる様子が見える。左側壁は現状で１段のみ残存する。羨道の上半部が失われているのは先に述べたとおりである。

天井石は玄室の３枚のみ残り、羨道部の天井石は失われている。奥から玄門側にむかってやや天井のレベルを下げているところに特徴がある。

以上のことをまとめ石室の規模等も併せて示すと以下のようになる。本石室は両袖式であり、袖部は羨道側にせり出さない。玄室は長方形に近いが、奥壁から石室中央に向かってやや幅を広げ、そこから玄門に向かって再び幅をやや狭める形状をなす。天井石は奥から玄門側にむかってレベルを下げていく。現状における石室全長は4.95m・玄室長3.90m・玄室幅（奥壁部分）1.96m・同幅（最大部）2.20m・羨道残存長1.05m・羨道幅1.34mである。石室はS-27°44′05″-Eの方向に開口する。石室石材は秩父帯から産出される砂岩・チャート類である。

（清家）

参考文献

廣田典夫　1979「第３編第１章　古墳時代」『南国市史』上巻　南国市、高知：pp. 181-316

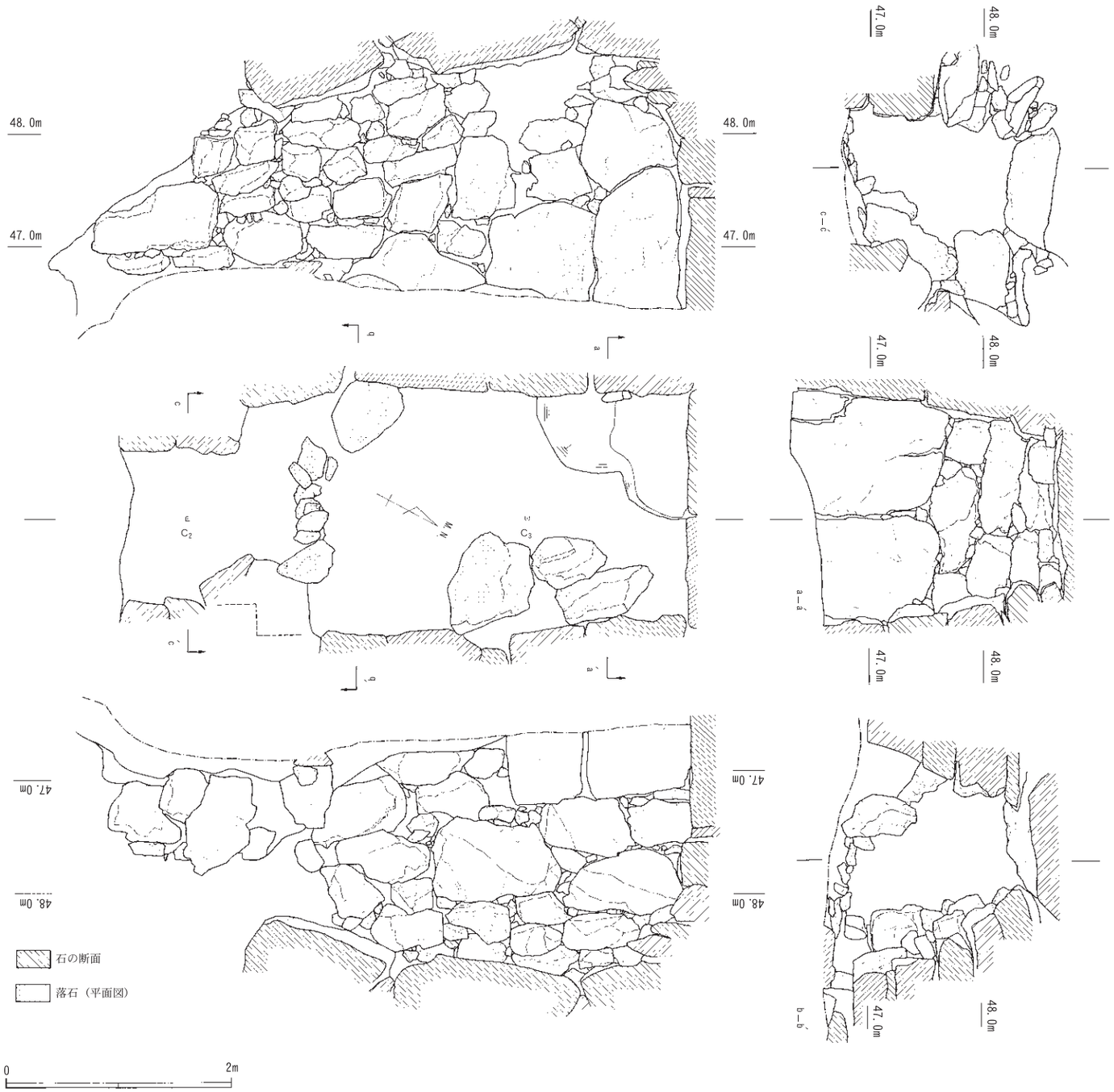

図９　石室実測図

第Ⅲ章　まとめ

測量調査の結果、坂ノ松古墳は直径11m前後の円墳であろうと考えられた。最終的には発掘調査を待たねば確定できないが、この想定は大きくはずれることはないであろう。

横穴式石室の現状での石室全長は4.95m・玄室長3.90m・玄室幅1.96m～2.20m・羨道幅1.34mの両袖式石室であることが明らかとなっている。畿内系横穴式石室によく似たいわゆる舟岩型の石室である（東1997・清家2010）。また、玄室面積8.1㎡[(1)]という規模は筆者の石室分類では標準型にあたる（清家2006・清家2007）。

舟岩型石室は、おそらくＴＫ43型式期に高知平野に導入され、ＴＫ209型式期以降に高知平野で主流を占める石室である。坂ノ松古墳もその一つである。舟岩型石室のうち、玄室面積10㎡以上の大型石室は、河川や丘陵で区画される領域を治める地域首長であり、玄室面積10㎡未満の標準型石室は、地域首長の下にいる小首長であろうと考えている（清家2010）。この考えを南国市南東部に適応させるならば、玄室面積12.3㎡の大型石室をもつ船岡山３号墳が坂ノ松古墳の北１㎞の地点にある（図２・図10）。図10は大型石室墳と特大型石室墳[(2)]の位置を落とした上で、それらを中心としたティセンポリゴンを作成したものである。坂ノ松古墳は船岡山３号墳を中心とした空間の中に位置する。船岡山３号墳被葬者がこの一帯を治める地域首長であり、

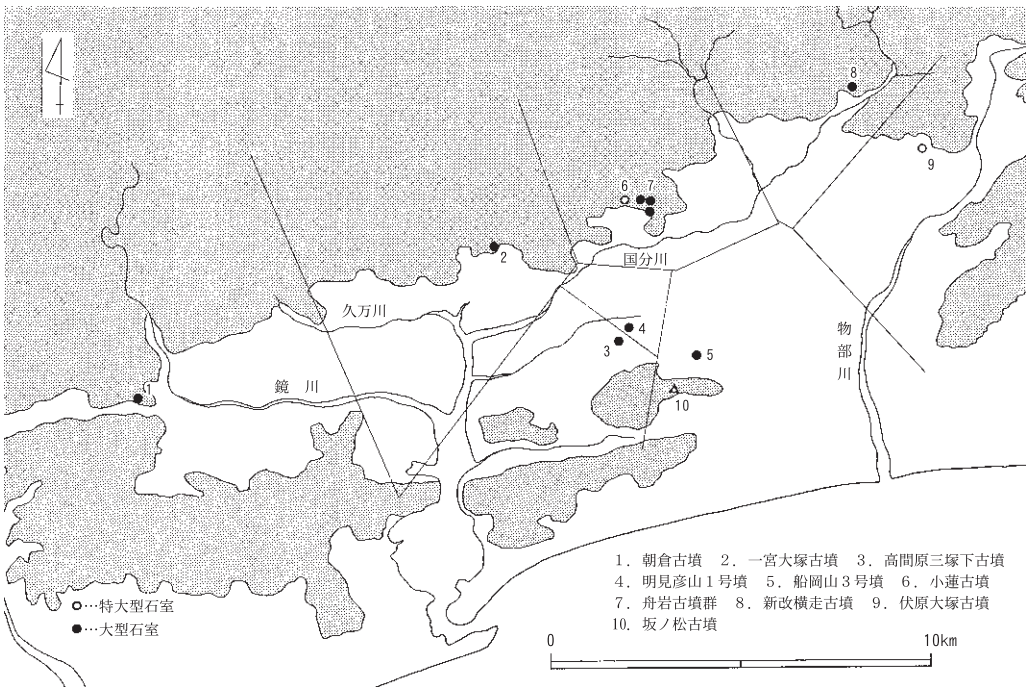

図10　特大型・大型石室の分布と坂ノ松古墳

坂ノ松古墳被葬者は稲生周辺の小首長ということになろうか。ただ、坂ノ松古墳周辺には馬背・丸山古墳群、井川古墳群などが存在する。こうした小古墳間の関係は未だ問われておらず、この点は今後の課題となる。古墳時代の階層秩序や小古墳間の関係については全国的にまだまだ検討が不足している。平野部・山地・丘陵・河川によって地域区分が比較的明瞭な土佐は、こうした研究に適しているといえよう。調査・研究を進め、この問題について高知から積極的に発信を行っていきたい。その中で坂ノ松古墳の意義はより深まっていくと考えられる。

（清家）

注

（1）　玄室幅の平均値と玄室長を掛け算して面積を求めた。

（2）　特大型石室は、玄室面積14㎡以上の石室を指す。標準型・大型・特大型の区別については清家2006もしくは清家2007を参照されたい。

参考文献

東　潮　1997「大里２号墳をめぐる諸問題」『海南・大里２号墳発掘調査報告書』海南町教育委員会、徳島：pp. 66-83

清家　章　2006「まとめと若干の考察」高知大学考古学研究室編『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学考古学調査研究報告第三冊　高知大学人文学部考古学研究室、高知：pp. 23-29

清家　章　2007「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』真陽社、京都：pp. 447-464

清家　章　2010「横穴式石室にみる南四国太平洋沿岸地域の諸関係」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系、高知：pp. 131-143

図　版

(1)　古墳の立地（▲の交差する箇所が古墳の位置）

(2)　墳丘（南から）

⑴　墳丘（北から）

⑵　石室入口

(1)　玄室奥壁

(2)　玄門

⑴　右側壁

⑵　左側壁

【報告書抄録】

ふ り が な	さかのまつこふんそくりょうちょうさほうこくしょ
書　　名	坂ノ松古墳測量調査報告書
副 書 名	
シリーズ名	高知大学考古学調査研究報告
シリーズ番号	第９冊
編 著 者 名	高知大学人文学部考古学研究室（編者：清家　章）
発 行 機 関	高知大学人文学部考古学研究室
所　在　地	高知市曙町２－５－１

所収遺跡名	所　在　地	コード	
		市 町 村	遺跡番号
坂ノ松古墳	南国市稲生丸山字坂ノ松越し	２０４	

北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
33°33′27″	133°37′36″	100824～100906	０㎡	学術調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
坂ノ松古墳	古　墳	古墳時代	横穴式石室		

坂ノ松古墳測量調査報告書

－高知大学考古学調査研究報告第９冊－

2011年１月発行

編集　高知大学人文学部考古学研究室

発行　〒780-8520　高知市曙町２－５－１

印刷　有限会社　西村謄写堂